平成２７年度　第２回浦臼町総合戦略審議会　次第

と　き　平成２７年８月３日（月）
午後３時～
ところ　浦臼町役場１階集会室

委員出席者：西脇隆二、土橋直生、石美紀子、石田稔、今村直、尾花裕美、小野康、齋藤浩司、金子弘昭、平松浩美、大野昌人（計１１名）

事務局出席者：渡辺和隆、藤島京子、猪田研究員、河本課長、石原主幹、小田係長、内藤主査、五十嵐主事補

欠席：高田英利、秦美雪、今野信行、北山学、松本隆浩（計５名）

１.開　　会

２.委員長あいさつ

３.議　　事

（１）　総合戦略策定にあたっての基本目標・分野別目標と関連施策整理について

委員長：議事の１番目、「総合戦略策定にあたっての基本目標・分野別目標と関連施策整理について」の説明を事務局の方からお願いします。

石原：委員の方々にまちづくりに向けた 4 つの分野において、アイディアをたくさん出していただいた。それと同時に全職員から、それぞれ重きを置くべき分野の施策事業を、お金等は度外視して、まずアイディアとして出していただいている。全て合わせると約 150 の事業があがってきている。共通する部分はあるが、皆さんが出していただいた意見を基に、骨子案ということで今回事前にお配りしたものを作成させていただいている。こういった進め方をすれば良いのではというご意見を基にたたき台として作った資料になるので、濃淡はあるが、同じレベルに合わせた文言修正をしているので、まず委託をしているぎょうせいの猪田研究員から資料について説明をお願いしたい。

「浦臼町総合戦略策定にあたっての基本目標・分野別目標と関連施策整理にあたって」に基づき猪田研究員が説明

委員長：ソート分析というのはある意味主観的なもので、作り手によって全然違ってくる。例えば、「競合劣位」の「近辺に吸引力のある施設・街がない」とあるが、これは裏を返せば需要を独り占めできるということでもある。もしかしたら強みになりうるかもしれない。また、その下の「札幌からの優等列車・直通列車がなく、距離に比して時間がかかる」とあるが、確かにアクセスを考えると不便かもしれないが、それが滞在型の観光につながる良い条件になるかもしれない。簡単に帰ってこれるならわざわざ泊まる必要は無いわけで、帰りにくいから一泊しようということになる。こう考えていくと、マイナス要因がプラス要因になる。その辺りをよく考えていく必要がある。いずれにしても、皆さんの意見やコメントをいただきたい。

藤島：プラス・マイナスともによくまとめられていると思う。これはどこのエリアでも言わせていただいているのだが、「一次産業なくして６次化なし」という言葉がある。一次産業をしっかり持っているエリアというのはとても強い。ただ、後継者問題はどうしてもつきまとうので、そこは皆で考えていかなければならない。

委員長：資料 3 ページ目の「人と自然が結び合う空知の夢大地・浦臼町」というフレーズは、地方創成ということを考えるともう少し絞った方が良いのでは。こういったキャッチコピーが使える自治体は他にもたくさんある。浦臼町ならではの言葉にした方が良いのかなと思う。
4 ページ、総合戦略における重点戦略目標の整理の方向性について、これは今後の大切なフレームワークになると思うが、「地産地消」というのは農作物のことを言っているのか？それともエネルギーなども含めて言っているのか？

石原：エネルギーまでは現状思い当たることはない。地域で循環させるという視点で、食べ物も仕事もそうだし、買い物も、浦臼の中で経済活動が全て網羅できればという思いを込めてこの表現の仕方になっている。うちの町ではなかなか買い物ができなかったり、お年寄りへのケアが行き届かない部分があったり、子供にとっても勉強や部活の面で競争がなかったり、弱み強みそれぞれあるので、そういった部分をすべてうまく地域の中で回していければ新たなまちづくりができていくのでないかという視点で「足元を支える」という書き方をしている。

金子：浦臼だけで集客するのも大切だが、広域で考えないと観光というのは難しいところがある。北海道の中でも空知というのは観光というイメージがない。実際は葡萄なり米なりフルーツなり炭鉱があったりで、各地で単発のツアーを組んでいる。他の市町村とも手を組んで観光というものを考えていくのも一つの手じゃないかと思う。特に今来ている海外の方には食べ物が非常に人気がある。そういったものを中心としたツアーを組んで海外の方なり国内の方の集客を図るというのもひとつの考え方だと思う。

委員長：他に意見が無ければ「地方版総合戦略構成骨子案の検討について」に移りたいと思うがよろしいか。
では説明をお願いしたい。

（２） 地方版総合戦略構成骨子案の検討について

地方版総合戦略構成骨子案に基づき猪田研究員が説明。

委員長：優先度を決めて思いっきり絞って進めていかなければならないと思うが、何かご意見は。

石田：他の町と同じような戦略にならないよう、先生も仰ったとおり、優先順位を決めて思い切ったものを挙げなければならないと思う。今のようにひとつひとつについて意見を聞いていては何も出てこない。

藤島：国からもらえるお金は本当に少ないという認識は持っていただきたい。じゃあなぜここに皆さんが集まっているかというと、皆さんも主体にならなければいけない。この資料に対して何か意見を言うだけではない。

今村：これらを絞り込んでいく時間はどれくらいあるのか？

石原：当初、国からの交付金が上乗せされる 10 月末までということでスタートを切った。上乗せ交付を受けるためのパターンが 2 つあるのだが、うちの町で上乗せ交付をもらうためには、10 月末までに計画を作って、そこの中に盛り込まれている施策に対して先行して進めるという部分で交付を受けるしかないかなと思っている。ただ、8 月中頃までに具体的な「こういった事業を行ってこういった成果を求めている」というところまで打ち出すようにと先日通知があった。もう一つのパターンとしては、

特定の目的を果たすもので、他の市町村に見本となるような先駆的な取り組みについて、優先して上乗せ交付をするというものだが、今現在先行型で取り組んでいる事業で何とか動かしているので精一杯な状況で、新しい取り組みができるかというと、それもできる状況ではない。それも 8 月 7 日までに具体的なものを提出するように通知が来ている。当初は皆さんに 10 月末という説明をしたし、議会にも説明をしたが、交付金を目当てに計画を作るということはしたくないので、少なくとも 28 年度の新年度事業にこの計画の中で出てきた事業が予算化できるようなタイミングまでに戦略をまとめていきたいという方向に考えを変えさせていただいた。概ね年内、12 月末までには形にして方向性を出さないと新年度には間に合わないかなと思う。2 ヶ月ほど遅くなるが、皆さん、職員から出していただいた事業について実現可能なものなのか、すぐできるものなのか、法的にクリアしなければならないものがあるのか、詰めていかなければ具体的なものとして計画に載せられない状況になるので、12 月の末といえども非常に時間がないかなと感じている。どれくらいまでという話だと、今の段階では 12 月末を目標にしていきたいと思っている。

委員長：今後どう進めていけば良いだろうか。例えば 4 つのワーキンググループに分けて議論を進め、最後に合わせるといった形がある。あくまで例えばの話で、こういったやり方もあるということ。

今村：毎回今日のような出席率で 4 つのグループに分けられるのか？「この回はここまで絞り込む」と決めてしまえば良いのでは？

委員長：そういった形で全員集まって予定を立てるいう事でよろしいか？

今村：削れるものは削り、できるかわからないものは残しながら絞り込んでいって、だんだん詰めていくような形が良いのでは。

石田：せっかくこういった形で集まるのに、拙速なやり方はどうかと思う。10 月末は間に合わないから年内にする、年内に間に合わないから年度内にするというような形にするより、思い切って年度内なら年度内にやると決めてしまった方が良いのでは。時間をかければ良いという訳ではないが。年度内にやらないと予算は付かないのだろうか？

石原：交付金は別として、町の予算として計上するという意味では、12 月末であればスムーズに進むと思う。いろいろな施策、必要な施策はあるけども、この分野についてまずは重点的に取り進める施策を絞り込み、議会にも説明しながら検討を進め予算化する形で進めていくと思う。今回出てきた施策は、自分の分野だけでなく全く関わった事の無い分野においても素朴な意見を積み上げたものになっているので、現実的には難しいものも含まれている。今後職員の中でも詰めて絞り込んでいく事になるので、絞っていく上で、例えば委員会の中ではこの 4 つの中のこういう部分を 1 番に、2 番目はこういう部分でという優先順位がつくようであれば、そういった意見をまた職員の方に下ろしながら職員の中でも審議していきたい。なかなか優劣付けづらい部分もあるので、切り口としてはまず職員の方で出来る部分の事業について検討を進めながら少しずつ絞り込んでいくしかないかなとは思っている。絞り込んだ段階で再度皆さんに意見をいただきながら更に絞っていければと思う。また、4 つの内 1 つしかできないかもしれない。ただその 1 つが出来ることによって次の施策につながる可能性も出てくるので、まずはどれかに重点を絞り出来ればと思う。ただそれを何にすれば良いのかは難しい。

大野：無理に 4 つに分けているが、整理すれば「まち」と「しごと」に分けられるのでは？「ひと」は「まち」と「しごと」にくっついてくる。4 つの分野があるから無理やりはめ込んでいるが、重複しているものもかなりある。整理すれば 2 つになるのでは。

藤島：先ほど支援の話をしたが、例えば、町の予算で支援ができているもの、国や道の予算で支援ができるものは最後にまとめておくのが良いのでは。
時間については、全ての自治体でぎりぎりでやっている。ただ、今までと違うのは見直しがすぐできるということ。この中で優先度が高いものはきっちり決めて、後から見直しをかけるという方法もある。

石田：行政的には全部網羅するしないは別として、年内に何らかの形で申請をしなければならないという事なのか。であれば、今出来ることを特化的に載せて、見直しながらその都度変えていくような方向で進めていくといった考え方でやらないと間に合わないということで良いだろうか。

委員長：今回は出てきた意見をそのまま載せたということだが、次回はもっと整理された資料を用意していただけるのだろうか。

河本：もし今日の会議で何らかのご意見をいただいて方向性が見えればそれを持ち帰り、職員に揉ませて 2 稿目としたい。

（３） 総合戦略策定にあたっての意見交換について

委員長：誰かご意見は。

平松：住んでいる人の幸福度を上げられれば良いと思っている。また、浦臼は人口が少ないので人材が足りないと言うが、マンパワーとしては悪くないと思う。町のために何かしたいが、どうすれば良いのか分からないといった人が相当数いた。

今村：農業が基盤とは言うが、硬直している感じがする。新規就農者を受け入れ、新しい考え方に託すという事も必要なのではないかと思う。ただ、新規就農者に対する施策が無きに等しい。この町の特産物を生かせる加工なり栽培なりを最初に設定した上で、全国から募集をかけ、それに対して集中的に支援をするなどといったやり方もあると思う。
農業生産法人育成はそれぞれの農家に任せれば良いのでは。
それと、チーズ工房を提案したのだが、あまり利用されていない町有地に放牧して、チーズを作る。そのチーズは、今無いものなので、特徴あるものとなる。体験型観光にもなりうる。また、放牧の豚にワイン用葡萄の搾りかすを食べさせれば、特産物になる可能性を持っている。よその町に無いものを作れる可能性がある。
　そういう風に一つ一つつぶして議論していけば、絞り込んでいけるのではと思う。

委員長：滞在型の観光は良いと思う。そこで重要なのが、ワインだと思う。

齋藤：いきなり醸造は難しい。例えば長期滞在中にワイン畑で作業体験をして、泊まる所がなければ町内の施設、農家や一般の民家に泊まる。そういった仕組みづくりをすれば、観光拠点へとつながって、４つの分野の横の連携へ広がっていくと思う。

石：皆で話し合ってひとつずつ削除していくのが良いと思う。

委員長：金子委員に関係してくるが、お年寄りや障害を持った方も気軽に観光ができるように、バリアフリー化すれば、大きなチャンスになると思う。

金子：実際、人的なサービスは逆に地方の方ができると思う。

委員長：計画の中に盛り込むことは可能か。

金子：基本的に農業の町なので、やはりそこから出発して、絞り込むならやはり農業になるのではないか。

委員長：まだ発言されていない方、土橋さんはどう思うか。

土橋：農業体験は農家にとっては重荷になっている。第三機関というか、収穫体験ができる施設を別に用意しておけば、体験型の農業ができるのでは。

委員長：小野さんはどう思うか。

小野：体験型の話が出たので、それに関連して。今、ピンネ農協青年部浦臼支部の方で婚活をやろうかという話になっている。その内容を考えていく中で、そば打ちの体験をやろうという事になり、役場に問い合わせたところ、場所や道具が無いから駄目だと言われた。だから、そういう体験ができる施設があればとは確かに思う。

石：人数は？

小野：男女１０人ずつで考えている。

石：そば打ちの道具はそれぞれで持っているので、できるのではないかと思う。

小野：あと、ざっくり見て農業とは関係なくこれはいらないだろうというのは、情報インフラや声優コンペだと思う。

委員長：浦臼町の案内人として、臼子を活用していく取り組みは必要だと思う。

石原：先ほど今村委員から新規就農者がポイントになるのではないかという話があったが、私含め役場職員もそう思っている。ただ、新規就農者に対する支援・サポート体制として、農業のノウハウ等を伝授していただけるような組織がなければ、新規就農はなかなか厳しいのかなと思う。そういったノウハウや技術を持ったお年寄りが指導できるような組織ができればそこを切っ掛けにいろいろ進めていけると思う。ただ、それをどういった形で募ったらいいのかという部分もあったり、そういった支援をしていただけるお年寄りがいるのか分からないという状況。まだまだお元気で、そういったノウハウを教えていただけるような方がいるのか、土橋委員にお聞きしたい。

土橋：近年離農したが技術の有る方が何名かいらっしゃると思う。

今村：例えば何年か農家で実際の仕事の手伝いをしてもらい、その間の生活費などを町で支援する。または、「浦臼町ではこういった作物が採れる、加工品まで志す人を希望する、そういった人を支援する」といった募集をかければ、ある程度知識や技術のある人が来るのではないか。農家はどこも人手不足だから、どこも受け入れてくれるのでは。

平松：メロン全般に関して、町外に発送している数はかなりあると思う。しかし、今メロン作りをやっている人がやめると、もう作れなくなってしまうという農家がかなりある。そういったところの経営移譲が進めば良いなと思う。

今村：新規就農者が違う視点で見てくれれば、チャンスは多いと思う。今後は規模ではなく、どれだけ特徴を出せるか、どれだけ消費者とつながれるかができる農家しか生き残れない。

石：少し外れるが、加工場を改修する予定はないか。

石原：中身は少しずつ入れ替えてはいるが、建て替えは今のところない。

今村：恵彩館の本来の目的は、町の農産物を加工して付加価値を付けるということだったと思うが、それに対して今どういう品目が加工されて、どういう風に販売されているのか、町民はあまり知らないのでは。本来ならあそこをもっと利用して、浦臼の農産物から新しい特産品を作り出さなければ。

大野：この総合戦略で６次化を組み込めば、そういったものは改善していけるのでは。

石原：ハードの部分はなかなか交付金はあたらないが、町としてそういった分野を充実させるということになれば、いろいろな補助事業を受けながらそういった施設を整備していくという流れになる。

石：一般の人が使える加工場はあるべきだと思う。

今村：あそこは観光拠点になる。鶴沼ワイナリーにツアー客は来ているが、その奥まで行ければ、まだまだ需要は掘り起こせる。

大野：観光の面でも産業の面でも、鶴沼はひとつのキーワードだと思う。鶴沼公園があり道の駅があり鶴沼ワイナリーがあり神内ファームがある。それらを連携させればブランド化というのはできると思う。

４.その他

委員長：他に意見がなければ終了とさせていただく。

河本：今日いただいた意見をなるべく汲み取って、次回第２稿として提案させていただこうと思う。

委員長：では、本日は終了とさせていただく。

５.閉会